

国語問題

〔問題一〕次の各文の――を付けた漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) 自らの失敗に慌^{わが}てる。
- (二) 相手を欺^{あやま}く。
- (三) 新しい任地に赴^{おもむ}く。
- (四) 苦難から脱却^{だつぎやく}する。
- (五) 条約を批准^{しはん}する。

〔問題二〕次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を書きなさい。

- (一) 紅葉した山が夕日にハ^はえる。
- (二) 相手の意見をシリ^{しり}ゾける。
- (三) 負傷者をキュウゴ^{きゅうご}する。
- (四) チョウのサンラン^{さんらん}を観察する。
- (五) メンミツ^{めんみつ}に打ち合わせをする。

〔問題三〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

農耕時代の話に戻ります。

その日暮らして楽しくやっていた採集狩猟社会の人が、農耕社会になって、急に^①「アリスンのようにさせられるわけです。これは、いまこの時代を生きているわれわれともよく似ているのですが、」^②「目的への疎外」があるのです。

子どもを例に考えていきましょう。

例えば中学校でバンドを組んで音楽をやりたいと、親に言ったとします。多くの親は、こう言うでしょう。

「あんた、そんなことをやっていると、いい高校に入れないわよ。(アリスンのように)ちゃんといま、勉強しなければ、いい高校に入れないんだから。バンドをやるんだったら、受験に成功してからでいいじゃない」

さあ、希望の高校に入ったとします。子どもは、もうバンドやってもいいよねと、親に言うでしょう。しかし、またしても親からこう言われる確率は低くありません。

「そんなことをしていると、あなた、いい大学に入れないわよ」

先ほどのセリフの「高校」を「大学」に置き換えただけで話は成立します。さらに、こんな言葉もオマケとして付け加えられるかもしれません。

「あなたが今ここにいるのは、いまを楽しむためではなく、大学受験をパスするためにあるのだということを知らないの？」

またしても、自分のやりたいことの先延ばしです。完全なる「目的への疎外」です。

では、大学に入ってしまったえば、バンドをやれるかというと、この世の中、事はそれほど簡単に運ばない。大学に入ってしまった^{*}モラトリウムという学生もいるかもしれませんが、いまみたいに就活が前倒しになってくると、いい大学に入ったとはいえ油断はできません。ダブルスクール、つまり学部授業の他に、専門学校でも何らかの資格を取っておかないと、就活を勝ち抜くことはできないというわけです。

ついに社会人になりました。誰に言っても恥ずかしくない会社に入ったから、これで心置きなく、好きなことをやってもいいよなと思いきや、そんな暇はない。

「ギミ、ちゃんとノルマをこなしてもらわなければ、会社にいつらくなるよ。昇進・昇給も期待できないよ」と釘を刺されたりするわけです。

このように、常に、いまここにいるということの意義が未来の目的を達成するためののだと、常に「目的への疎外」を経験することで、私たちはいまを楽しめなくなっていくます。いまアリとして生きていく、その目的を達成する生き方をする、ここから楽しめる時間は非常に少なくなってしまうのです。

高校や大学の受験をクリアした、いい会社に就職できた……と、一瞬だけ喜んでいるのだけれど、絶え間なくアリとしての日々を突きつけられる。

目的への疎外をされているが故に、人間^{ゆえ}というのは色々な文明を生み出してきたというのは疑いのないことです。目的への疎外がなけ

れば、立派なビルも建っていなければ、道路や電車などの交通網、スマホといった通信機器もなかったでしょう。これを完成させることで、人生が豊かになれる、生活が楽しくなるという明確な目的をもっているからこそ、達成できたのです。

※、よく考えてみなければいけないのは、われわれはそうした目的を達成するためだけに生きているのかということです。そうではないはずです。本来は、^③ 日々を楽しんでいるために生きているわけですから。

採集狩猟社会と農耕社会を、「楽しさ」や「豊かさ」という尺度で比較した場合、前者の時代は、みんな生きている人たちが平等な仲間だったわけです。ところが後者、農耕社会になると、階層化が進み身分の上下関係ができたことで、利害の対立が起きました。同じ階層の中でも、競争が生まれます。たとえば水をめぐる争いです。川から水田に水を引いている場合、朝、自分の水田に行つてみたら、水が流れ込んでいない。水路をたどってみると、近くの水田を耕している人が他へいく水路を遮断して、自分の方に引いていることがわかります。まさに「我田引水」です。話し合いで解決しない場合には、言い争いになったり喧嘩^{けんか}になったりする。隣人もある条件になると、敵になる可能性もあるわけです。

何でも^④「差異」という基準でものを判断すると、ネガティブな反応を生むケースがあります。少しでも抜け駆けするようなヤツがいたら撃ち落とす、みたいな危険な衝動を掻^かき立てられます。自分よりも幸せそうな人を見ると、その分、自分が割を食って不幸になっていると思う。周りの人が潜在的な敵のように見えてきてしまうわけです。そんな思考を繰り返しているうちに、その人は孤独に陥ってしまいます。用心しないと、いつ足元をすくわれるかわからないと警戒していると、その人の生命力は衰え、精神的にもトラブルを起こしやすくなるのです。

(上田紀行『立て直す力』より)

(注) モラトリウムⅡここでは、学生が社会に出て、精神的に社会人として成長するまでに周りから大目に見られる期間のこと。

(二) ——線部①「アリさんのようにさせられる」とは、どういうことですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 時間にせかされ続ける毎日を強いられること。
イ 集団としてまとまった生活を強いられること。
ウ ただ働くことばかりの日々を強いられること。
エ 一人の権力者を崇拜するように強いられること。

(二) ——線部②「目的への疎外」とありますが、本文中での「目的への疎外」を説明した次の文の□に入る最も適当なことを、本文中から十四字で抜き出さない。

今、好きなことを楽しむことができず、□をさせられること。

(三) ※□に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア または イ 例えば ウ すると エ しかし

(四) ——線部③「日々を楽しんでいると感じるために生きている」とありますが、「日々を楽しんでいると感じる」ことができなくなる行為として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア「ゲームばかりしていると、明日の英単語のテストで合格点がとれない」と言われること。
イ「音楽をやりたいなら、今バンドを組んで活動しないと手遅れになるよ」と言われること。
ウ「今の時代、英語が話せるようにならないと、よい会社に就職できないよ」と言われること。
エ「仕事で昇進や昇給をするためには、決められたノルマを達成する必要がある」と言われること。

(五) ——線部④『差異』という基準でものを判断すると、ネガティブな反応を生むケースがあります」とはどういうことですか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と周りとを比較し、その差を損得によって判断することで、周りの人を敵とみなすこともあるということ。
イ 自分の仲間だと思っていた人であっても、利害の対立が起けると、敵になる可能性があるということ。
ウ 身分の上下関係が生まれたことで不平等な社会となり、自分の利益しか考えない人が多くなったということ。
エ 周りの人との競争を有利にするために相手との差を知ろうとすると、自分の欠点ばかりが見えてしまうということ。

(六) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア「目的への疎外」の問題点を、農耕社会の成立から現在に至るまでの歴史を通して説明している。
イ「目的への疎外」が引き起こされる具体例をもとに、その利点と欠点を提示して説明している。
ウ「目的への疎外」における問題点と今後の解決方法を、一般論や資料をもとに説明している。
エ「目的への疎外」が生じる理由を、筆者がこれまでに経験した実体験をもとに説明している。

(七) 本文中で筆者は、「目的への疎外」について述べていますが、そうした経験が度重なることで、私たちはどのようなようになってしまったと考えていますか。「目的への疎外」の内容を明らかにしながら、「時間」ということばを必ず用いて、五十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題四〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

アルバイト先で暴力事件を起こした十七歳の鳴海円人は、家庭裁判所に送られてから審判が下るまでの一定期間、自宅から生活の場を移す「補導委託」の処分を受けることとなった。補導委託先に選ばれたのは、花火の製造所を営む深見静一ふかみせいいちの家だった。次は、円人が自分の十八歳の誕生日プレゼントとして打ち上げられた花火を見て涙を流し、その姿を見た深見が「花火師（花火職人）」にならないかと円人にたずねた場面である。

「なんでおれなんかに」

深見はふっと笑って円人の目を見た。

「花火師に向いてると思ったから」

花火師――。

考えたこともなかった。ちがう、ずっと考えないようにしていた。作業のこと、打揚げ現場うちあげでのこと、生き生きとした目で語り合っている日置兄弟ひおきが、深見が、*有本ありもとが、まぶしかった。

まぶしくて、これまで円人は目をそらしていた。自分とは関係のない世界だから。まるで違う世界の話だから。はっと、息をすった。

いつから息を止めていたんだろう。息をすると、のどがふるえた。

おれも行けるんだろうか。いいんだろうか。

円人は首を振った。

ばかか、そんなことダメに決まっている。

「①無理です」

「なんで」

「だ、だいたい向いてるとか、そんなわけ」

「そんなわけない、ってか？」

だって花火は人を喜ばせるものだ。人を感動させるものだ。花火師の手はそれを作り出す手だ。おれの手は、人を傷つけた。感情を抑えきれず、怒りを、憎しみをそのままに……。

円人は右手を強く握り、そのこぶしを左手で包んだ。

「ひとつの尺玉を作るのにどれくらいかかると思う？ 二カ月以上だ。ものによっては半年近くかかるものもある。それだけの時間を

使って、いざ打揚げたらたった六秒、一瞬だ」

深見はすっと背中を伸ばした。

「②花火師つてのは、そういう仕事だよ」

円人には深見のことばの真意がつかめなかった。

「いまの話とどう関係があるんですか。おれが向いてるっていう理由がわかりません」

どうせ「なんとなく」とか「勘」とか、そういう抽象的であいまいなことを言うのだろう。

あたりまえだ。深見はなにも知らない。もちろんこれまでの生い立ちや、生活環境や家族のことは、ある程度聞いているだろう。でもそれは、おれの、鳴海円人の一部でしかない。そもそも、自分でも自分がどんな人間なのかわからない。

なのに、向いてる？

「③円人はぎりっと歯を食いしばった。

きれいなことばでざわつかせるな。期待させるな。適当なことを言うな。

「理由ねえ」

深見の口調が、笑いを含んだのんびりとしたものにかわった。

「そうだなあ、理由はみつっただな」

深見は腕をさすってヒーターのスイッチを押した。

「おまえさ、メシのとき、手を合わせるだろ。いただきますってさ」

円人は眉をひそめた。

「なんの話をしてるんですか」

「だから、おまえが花火師に向いてるって話だろ」

円人が口ごもると、深見はふっと笑った。

「メシを食うとき、手を合わせていただきます。それ、こんなちっこい子どもでもできることだよな。でもそれができない、っていうか、あたりまえのことをしなかったり、忘れているやつもけっこういるんだよ」

「……」

「おれは人を見ると、あたりまえのことができる人間かどうかを一番に見るようにしてる。あたりまえのことを、あたりまえのこと

としてできる人間は、これからもそうやってあたりまえを増やしていく。増やしていける人間だと思ってる」

円人は戸惑ったように視線を下げた。

「もうひとつは、観察力」

深見はゆっくりうなずいた。

「うちに来た日の翌朝、おまえは箸をそれぞれの席に並べたんだよ」

箸のことは覚えていて。それぞれ自分の箸というものがあることに驚いたのだ。

「あれは夕食のとき」

「だろ。前の晩メシのときに、みんなが使っていた箸を見て覚えてたんだろ」

「たまたま、偶然です」

円人がぼそりと言うと、深見は苦笑して円人の頭に手をのせた。

「たまたまでも偶然でもどうでもいいんだよ。あのときおまえは、みんなの持っている箸を見て、誰がどの箸なのかを覚えて、翌朝あたりまえに箸を並べた。それだけのことだ」

円人が頭の上の手を払いのけようとする一瞬前に、深見は手をおろした。

「で、みつつめは」

「……」

「やつばこれはやめとくかなあ」とあごをこする深見に、「ちゃんと行ってください」と詰め寄ると「なら、文句言うなよ」と念を押して深見は、わずかに笑いをにじませた。

「花火を見て泣いたから」

円人はぐつとことばを詰まらせて、深見をにらみつけた。

「だから言っただろ、やめとくかって」

「おれは」

「涙じゃなくて雨だろ。どっちでもいいよ」

そう言ってこぶしを口元にあて、大きく息をついて円人を見た。その目はもう笑ってはいなかった。

「④花火で心が動いた。だろ？」

「……」

「同じ花火を見ても、感じ方は百人いれば百通りある。あつていい。花火は人の目を楽しませるものだ。単に楽しいでもいい。充分だ。でもおれはさ、観^みている人の中で一人でも二人でもいい。誰かの感情を揺さぶるような花火を作りたい。で、そういう感受性をもっている人間が、どんな花火を作るのか見てみたい。単純にな」

深見は自分のことばに数度うなずいて、円人を見た。

「どうする？」

「おれが、決めるんですか」

おいおい、と深見は顔をしかめた。

「自分のことだろう。おまえが決めないで、誰が決めるんだよ」

円人はもう冷めているであろうカップの中のコーヒー牛乳をじっと見つめた。

いいんだろうか。

昨日見た、金色の光の線、光の尾を引いて降るあの花火。

いいんだろうか、夢を持っても。そんな世界に踏み込んでいいんだろうか。許されるんだろうか。

そう問えば答えはNOだ。

だけど……。

円人は視線をあげた。

「花火で、一人で生きていけるようになりますか」

窓の外が白くなり、鳥のさえずりが聞こえた。

自らの夢ではなく、生きるための仕事としてなら、許されるかもしれない。……言い訳だ。自分でもわかっている。けれど言い訳でもなんでも、自分にイエスと言わせる口実が欲しい。

「食っていけるかって意味ならイエスだ」

深見は円人から視線をそらさずに答えた。

「当然、一人前になるまでには時間はかかるけどな。ただ」

ただ？ 深見の目をうかがうように見ると、やわらかに目を細めた。

「一人で生きているやつなんていないぞ」

「……」

「一人で生きているつもりでも、本当にそれができるやつなんているか？ 少なくともおれはそんなやつを見たことがない」

わきの下に汗が滲^{にじ}んだ。円人はごくつと唾をのんだ。
「食って、いけるようになればいいです」

そう言って「お願いします」と円人は頭を下げると、深見はゆっくりうなずいた。

(いとうみく『夜空にひらく』より)

(注) 日置兄弟・有本＝深見の花火製造所で働く従業員。

(二) ——線部①「無理です」とありますが、このときの円人の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 深見から花火師に向いていると言われてうれしさが込み上げてきたものの、夢をもたずに生きてきた自分と生き生きと仕事を
日置兄弟や有本とを比べ、自分は本当に花火師に向いているのだろうかと不安になる気持ち。

イ 感情を抑えられないままに人を傷つけてしまった自分には見る人を感動させる花火を作る資格はなく、そのような自分自身に悔し
さや腹立たしさが湧きあがるとともに、花火師にならないかと誘う深見に反発する気持ち。

ウ 深見から花火師に向いていると言われて今後の自分の進むべき道が見つかったことに安心したものの、具体性に欠け、感覚的なこ
とばかりを口にする深見の話を本当に信じてよいのだろうかと疑う気持ち。

エ 深見から花火師にならないかと誘われて心を動かされたものの、花火を作ることが本当に自分のやりたいことなのかがわからず、
中途半端^{はんぱ}な考えのまま深見の問いかけに答えてよいのかどうかを悩み苦しむ気持ち。

(二) ——線部②「花火師つてのは、そういう仕事だよ」とありますが、このときの深見の様子として最も適当なものを次の中から一つ
選び、記号で答えなさい。

ア 花火師になることを断ろうとする円人に対して、製造に多大な時間がかかる花火師という仕事を今までずっと続けてきた自分に頼
れば安心だということを示そうとする様子。

イ 花火の製造に多くの労力がかかることはよく知られているのに、花火師を目指す若者は多くいて、円人のように花火師になること
を誘われるのは珍しいことなのだということを示そうとする様子。

ウ 花火師は見る人に楽しんでもらうために花火の製造に膨大な時間を費やす仕事であって、いくら円人に花火師としての才能がある
とはいえ、生半可な気持ちでは通用しないことを示そうとする様子。

エ 製造することは大変だが、見る人を楽しませることができる花火の仕事に誇りを持っており、その仕事としての労苦とやりがいの
両方を円人に理解して欲しいということを示そうとする様子。

(三) ——線部③「円人はぎりつと歯を食いしばった」とありますが、円人が歯を食いしばった理由を説明した次の文の□に入る最
も適当なことを、それぞれ本文中から、①は八字、②は七字で抜き出しなさい。

これまで、花火師の世界から□①□の□に、深見が□②□を使って期待させることが許せなかったから。

(四) ——線部④「花火で心が動いた。だろ？」とありますが、このように深見が円人にたずねた理由として適当でないものを次の中か
ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花火を見て泣くほどに感情を揺さぶられた円人がどのような花火を作るのかを知りたいと思っていることを、どうしても円人に伝
えなかったから。

イ 花火を見て感情が動かされたことを認めようとしないう円人に対して、花火には人の感情を大きく揺さぶるだけの力があることを伝
えなかったから。

ウ 花火を見てどのように感じるのかは人それぞれであって、感情が揺さぶられて泣いたことを恥ずかしいと思う必要はないと伝えた
かったから。

エ 見た人の感情を揺さぶる花火を作りたいと考えていたので、自分の花火を見て感情をあらわにした円人には花火師としての適性が
あることを伝えなかったから。

(五) 本文中の表現の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア「おれも行けるんだろうか」や「いいんだろうか」と円人の視点を通した素直な心情が会話調で描かれることで、円人の花火師に対
する本心とそれに反する気持ちとの葛藤が表されている。

イ 深見の発言に対して、円人が「……」と言葉を詰まらせる様子を何度も描くことで、二人の間には埋めることのできない大きな溝
があることを表している。

ウ「やっぱこれはやめとくかなあ」など、深見がおどけた調子で話す様子を描くことで、今後、円人の花火師に対する気持ちが前向き
になっていくことを暗示している。

エ「金色の光の線、光の尾を引いて降るあの花火」と光り輝く花火の情景を描写することで、今後、円人には花火師としての明るい未
来が待っていることを暗示している。

(六) ……線部「花火で、一人で生きていけるようになりますか」とありますが、円人がこのように言ったのは、どのような思いがあっ
たからですか。本文中のことはを用いて、六十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題五〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

言文一致という考えがあります。これは、明治二〇年代に、とくに小説家を中心に進められたものです。言文一致は、言（話し言葉）を書くということを意味しているように見えます。しかし、現在でもそうですが、話し言葉は、地域によってまったく違ってきます。実際のところ、言文一致は、それまでの文語体において、その語尾だけを口語化することであり、しかも、その語尾は江戸弁です。その他の地域においては、^①この言文一致の文章は、少しも言話し言葉と合致していません。言文一致とは、実際のところ、新たな「文」であり、また、それは標準語として、日本全域に、それを「話す」ように強制された「文」なのです。たとえば、沖縄の人たちは、言文一致の「文」を話すように強制されたわけです。しかし、この新たな文が標準化されることができたのは、すでに「文」が^アある程度日本全域に確立していた、つまり書き言葉としては共通していて、^②たんに語尾などを変えればよかったからです。

要するに、現在の日本語の文章は、しゃべられていたものを書き写したものではありません。その逆に、われわれは、書かれた文章をしゃべっているのです。こういえば、誰でも反論でき^イないはずですが。ところが、古代の書き言葉を対象とすると、^ウとたんに錯覚に陥るのです。たとえば、『^③源氏物語』のような文章は、仮名で書かれているから、同時代の口語（大和言葉）^{やまと}を書き写したものにちがいない、と考える人が多い。『源氏物語』は、同時代にすでにかなり広範囲に読まれたことがわかっています。しかし、それが話し言葉を書き写したものであるとするのは、明らかにおかしい。というのは、現在でも各地の方言まる出しでしゃべられると通じないのだから、当時の人たちが、せいぜい京都の宮廷で使われていたような話し言葉を理解できたはずがないからです。

たとえば、江戸時代、参勤交代というシステムのために江戸に^④集まった各地の武士は、互いに話が通じないので、謡曲や漢文に^エもとづく侍言葉を作りだした。それは、古典落語からわかるように、江戸っ子から馬鹿にされていますが、やむをえないものでした。その場合重要なのは、彼らが全国に普及している「書き言葉」をもとに「話し言葉」を作ったということです。実は、これは、平安時代についてもいえるはずです。たとえば、なぜ『源氏物語』が広範囲に読まれたのか、そして、それがまもなく規範的な古典になっていったのか、それは、『源氏物語』が、すでに存在し全国で通用していた文語に依拠し、それをあたかも「言文一致」のように書いたものだったからです。

（柄谷行人『文字論』（一〈戦前〉の思考）より）

（二）——線部①「この」と同じ品詞のことばを、本文中の——線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

（二）——線部②「たんに語尾などを変えればよかったからです」を単語に分けると、いくつになりますか。漢数字で答えなさい。

（三）——線部③「源氏物語」の作者は紫式部ですが、^ア作者名と^⑤作品名の組み合わせとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ^ア芥川龍之介 ^⑥雪国
- イ ^ア太宰治 ^⑥人間失格
- ウ ^ア夏目漱石 ^⑥坊っちゃん
- エ ^ア島崎藤村 ^⑥破戒

（四）——線部④「集まつ」と、——線部が同じ活用の種類になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 必死に勉強すればテストでよい点数がとれる。

イ 買ったばかりの服を部屋で着る。

ウ 母に、明日は友達と出かけると伝えた。

エ もっと丁寧に字を書いてください。

（五）——線部「なぜ『源氏物語』が広範囲に読まれたのか、そして、それがまもなく規範的な古典になっていったのか」とありますが、「源氏物語」が広い範囲で読まれ、規範的な古典となった理由を説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、本文中から十二字で抜き出しなさい。

「源氏物語」は文語という、これまでに□ことばをもとに書かれたから。